第 11 講 プロジェクトベースの学習

成瀬喜則（富山大学・名誉教授・学長特命補佐）

1. プロジェクトベース学習（PBL）とは

現在、世界は日々大きく変化し、さまざまな問題が発生している。当然、我が国だけで解決できる範囲は限られており、世界の変動に合わせて大きく動いている。価値観が多様化し、社会がグローバル化している中で、これまでの経験だけで判断することが難しく、他人からの影響や社会からの影響を受けずに行動することが難しい時代になっている[1]。

文部科学省は、今は予測困難な時代であるとした上で、『将来の変化を予測することが困難な時代を前に、子供たちには、現在と未来に向けて自らの人生を拓いていくことが求められている』とし、さらに『自らの生涯を生き抜く力を培っていくことが問われる中、新しい時代を生きる子供たちは生き抜く力を身につける』必要があるとしている[2]。

つまり、これまでの知識や技術を身につけるだけでは、グローバル社会で活躍することは難しく、現在、おきている問題を整理し、課題を見いだし、自らの力はもちろん、他者との連携によって解決していくことができる力を身につける必要があるとしている。

将来を予測するとはどういうことか、また、その予測から課題を見いだすということはどういうことか、さらに、その課題を解決するためにどのように考えていけば良いのか、ということについては非常に曖昧であり、明確な答えがないのも実情である。

このような問題に向き合っていくためには、児童生徒はもちろんのこと、教師も一緒に考えていく必要があり、児童生徒を支援していく活動が有効である。そのため、身につけなければならない知識や概念は何か、それらを有効に生かして課題の解決に向かうにはどうすれば良いかを理解することが重要である。

本講では、このような時代に有効な学習としてプロジェクトベースの学習（PBL: Project Based Learning）を取りあげて解説する。実際に行われている学習事例を取りあげて、これからの学習に必要な考え方について述べる。

2. PBL とアクティブラーニング

プロジェクトベースの学習（PBL）は、実は新しい考え方ではない。アメリカの教育学者ジョン・デューイやウィリアム・キルパトリックの学習理論をもとにして発展してきた。その後、PBL は教育現場や企業研修で活用されるようになり、現在ではアクティブラーニング（主体的な学習）の手法の一つとして広く知られている。

一般に、PBL にはチュートリアル型と社会連携型があるとされている（図 1)。前者は事前に示される問題を理解し、既知の知識・経験を基に新たな知識を主体的に学習する方法である。学習者が現実に近い状況を疑似体験できるように状況設定がなされており、問題解決プロセスを練習することになっている。現実をシミュレーションしたものであるが、あくまでも教室内で課題解決が可能であり、比較的短時間で学習することが可能である。

それに対して、社会連携型とは、実際の社会で発生した課題を対象として、地域社会や学外組織との協働によって取り組む方法である[3] [4]。学習者は、実際のステークホルダーと接して、情報収集や分析をして、課題を解決することで、コミュニケーション力や課題解決力が身につくメリットがあるが、その一方で、長期間の学習が必要となることが多い。社会連携型 PBL は、実社会の現実的な課題にチームで取り組む実践型学習であり、社会人になったときに通用する問題解決能力を育成することができるが、このようなタイプの学習にはさまざまな連携先と綿密な調整が不可欠である。

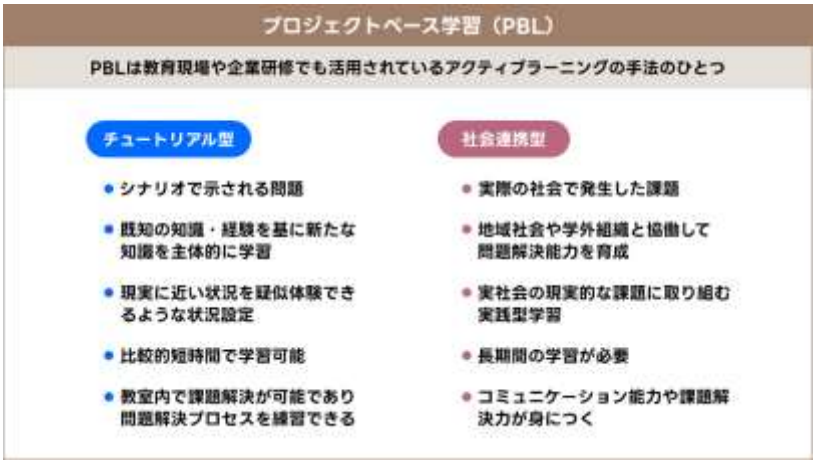

図 1,　プロジェクトベース学習について

３．探究学習と課題解決型学習（PBL）について

探究学習と PBL は似ているところが多くあり、区別化することは難しい。どちらも設定された課題について、情報を整理し、収集し、分類・比較、分析を通して解決していく流れを取る。さらに、これらの活動は 1 回で終了するものではなく、繰り返されるものである。

PBL は実社会に即したものを取り扱うことが多いとされており、いわゆる社会課題を具体化したものに対して取り組み、解決案を考えたり、もの作りを通して提案したりすることが多くなる。それらの解決策を考察する活動を通して、問題解決能力や分析能力を育成する。具体的で社会的な課題が多いことから、企業での研修としてこの手法が使われている。

これに対して課題そのものを自ら求め、考えて、それに取り組むところを重視するのが探究学習である。社会現象や人生設計など幅広いテーマの中から、取り組むべき問題を見いだして、それに対して情報を整理し、収集し、分類・比較、分析を通して解決していく流れを取る[5]。

PBL は、先述したように具体的な社会問題や学術的な課題に対して取り組む。課題そのものの設定を重視するというよりも、すでにある明確な課題に対して解決策を考えていくことが多いと考えられる。

学習者（生徒や社会人）がそれに対する解決策を考え、実行していく中で、どのような手法を使い課題解決を図っていくかということが重視され、学習過程がある程度学習者にわかるようにすべきである。調査、情報の分析、分析結果に基づく議論、結論の提案、プレゼンテーションなどを行い、その成果は、成果物、レポートや事例提案として報告される。

学校教育においては、教員は一斉授業のように指導していくのではなく、ファシリテーターあるいは支援者として、学習者が主体的に問題解決に取り組むための相談役になったり、支援者になったりすることが必要である。さらに、学習は単独で進めるのではなく、グループを作って取り組む学習が重要であり、多様な意見をまとめながら学習が行われる。学習者が主体的に学び、協働的な学習環境を作ることで、学習者が課題に対して深く理解して、解決するために必要な手法を見いだすことで実践的なスキルを養っていく。

PBL は、実際の現象を対象として行うことが多いため、学習者にとっても学習の見通しを立てることが容易になり、学習の意義や目的を実感することができる。PBL は現在の教育において重要な役割を果たす学習方法の一つである。

４．PBL の進め方

本節では学生や高校生と一緒に取り組んだ内容をもとにして解説する。ただし、一部は理解しやすいように内容を変更している。既に説明したように、PBL は具体的な問題に対して、取り組む課題を明確にして、分析方法や必要な調査を明確にして解決していくことが必要である[6]。

一般に、次の手順を経てプロジェクトが進められるが、これらの流れを何度か繰り返すことが必要である。

①プロジェクトの目的と課題の設定、計画立案
②課題に関する調査と分析、結論と考察
③プロジェクト成果の発表、評価
④評価をもとにした改善点の明確化

具体的な事例をもとに進めてみる。

図 2　プロジェクト学習の進め方

（1）課題の設定と計画立案

PBL の進め方について考える。PBL は、基本的に課題が明確であることが必要である。多くの場合は、具体的な社会問題を取りあげてその解決策を考える形を取る。プロジェクトの目的に応じて課題を決めることが必要であるが、課題が抽象的なものや、解決できそうもないものである課題は避けるべきである。あくまでも自分事としてとらえることができることが重要である。

高校生や中学生に与える大きなテーマとして、「地域を理解して地域に貢献する」「地域をよくすることを考える」としてみる。地域とは生徒が居住している地域であり、「理解する」とは、地域の文化や伝統の良さや大切さを知ることはもちろん、就労事情、経済状況等々生活する上で知っておく必要があることも多くある。

そこで、生徒が取り組める課題を「地域の良さを生かす仕事を見つける」とした。どの地域でも人口減、少子化、高齢化が進んでおり、若者の流出が進んでいる。その一方で、地域の良さを知って、地域外から移住して起業したり、ビジネスを開始したりする若者もいる。

PBL を進めるにあたって、フォアキャストとバックキャストの 2 つの考え方があることを理解しておくと良い[7]。前者は、現在の課題を分析し、将来の予測をしたり、解決策を考えたりする方法である。それに対して後者は、最終の姿を先に設定し、そこから逆算的に行動や活動内容を決めていく方法である。それぞれにメリットとデメリットがあるが、双方の手法について理解をしておくと良い。

以下に具体的に調査に入る前に解決策について立案する。

（2）課題に関連する調査・分析と結論と考察

地域の良さを生かす仕事を見つけるという課題を解決するためには、地域を知ることが必要である。特に、地域で活躍している人から背景や活動内容を聞くことは有効な手段の 1 つである。

そこで、下記の手順で活動を進める。

① 起業している若者や地域住民に聞きたいことを列挙して、インタビューの方法も含めて精査する。

② 現地でインタビューし、その結果をグループワークで話し合い、重要なキーワードを抽出する。

③ キーワードの中から、解決策として有益なものを選び、それについて検討する。

聞き取り調査からキーワードを抽出するためには、生成 AI を使って音声データをまとめるという方法もあるだろう。それをもとにして、重要なワードをできるだけ多く列挙して、グループワークで議論しながらグルーピングすると効果的である。

例：

グループ 1　支援　ビジョン　活発　⇒　地域を盛り上げようとする雰囲気がある

グループ 2　イベント　地域の理解　⇒　地域から理解が得られる

グループ 3　ネット販売　協働事業　⇒　他分野と協働し、ネット販売ができる

これらのグルーピングから、「雰囲気」「理解」「協働」が地域外から移住して起業したり、ビジネスを開始したりするきっかけになっていることがわかる（図 3)。この他にも、地域住民にアンケートを依頼したり、地域の行政機関にインタビューしたりするなど、さまざまな調査方法がある。プロジェクトはスタートからゴールまで数ヶ月程度かかると考えて、長期間の学習を見通して計画する必要がある。

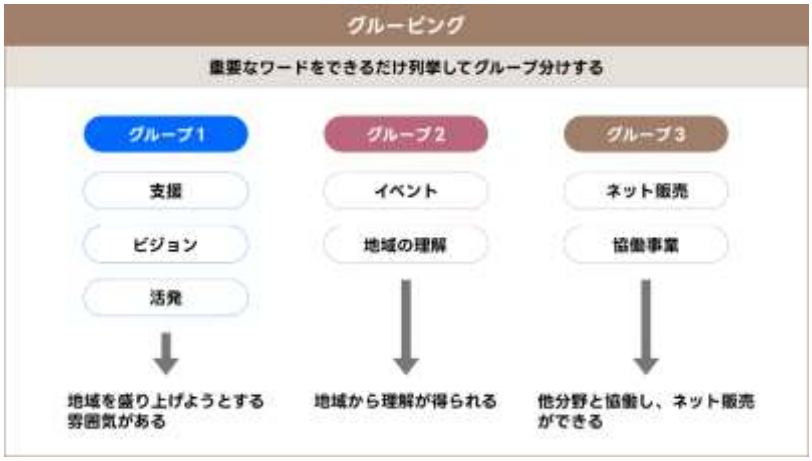

図３　グルーピングによる議論

得られたキーワードの中から一つ選び、地域の良さを生かす仕事を見つける学習を進める。あるグループは、「地域を盛り上げる雰囲気を作るにはどうすればいいか」を考えるとする。地域コミュニティは、人と人との関係が強く、お互いに強い影響を与え合っている。それを「お互いに助け合って生活している」と考える人もいれば、そうでないと考える人もいる。大学生にアンケートを取ると、後者の意見を述べる学生がいる。そのため、心地良い人と人との距離感はどうあるべきかを考える必要がある。これは人によって、あるいは世代によって異なるものであり、一つの結論にたどり着くものではない。そこで、適度な人間関係を維持するためのコミュニケーションルールを作ったり、オンラインアプリを作ったりすることを最終課題としても良い。

また、別のグループは「他分野と協働（さまざまな分野の人と協働して働く）するにはどうすればいいか」を考えるとする。地域で働くことについて、「自分に合うと思える仕事が見つからない」と考えている若者がいる。働くということと生活するということの関係についてしっかり意識を持つためにはどうすればいいかという課題や、地域に関する情報が若者に行き渡っていないという課題がある。

そこで、地元にはどのような企業や仕事があるのかを調べる。企業へ実際に赴いてインタビューすることも有効だが企業ホームページを調べると言う方法もある。また、就職先を企業に限定せず、個人商店や起業している人を対象に調査することも大切である。まず、若者がどのような意識を持っているか調査する。特に、将来地元以外で働きたいと思っている人が、どうしてそう思うのかを調査できるとその後の議論の役に立つと考えられる。

（3）プロジェクト成果の発表、評価、改善点の明確化

(1) (2) で進めてきた学習の成果を発表する。グループワークを行って課題を整理して、解決策について議論する。グループがいくつもある場合は、グループ毎の発表を通して情報を共有することが最も重要である。その際、分析ツールを使って議論して、それをもとにして発表することも有効であり、グループから他のグループに出向いて、自分達の考えを説明して、質問や意見をもらいながら議論すると考えをさらにまとめることもできる。この手法の代表的な方法がジグソー法と呼ばれるものである。

学習で大切なことの一つは、最後に振り返りを行い、自分達の考えをまとめて再度整理することである。これによって、複眼的な考え方を受け入れることができるだけでなく、他者への説明能力を高めたり、自分たちの取り組みに自信を持ったりすることができる。

5. 最後に

PBL は学校教育でも企業研修でも有効な学習方法と言える。大切なことは、課題をしっかりと認識すること、客観的な分析方法を使ってデータを分析すること、他者が納得するような表現方法で伝えることである。

個人で考える場面、グループで協議する場面、振り返ってフィードバックする場面など、日頃からこのような場面での学習に慣れることは PBL を自分事にするために必要な方法である。

参考文献

[1] 文部科学省(2024), 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編（令和 6 年一部改訂）

https://www.mext.go.jp/content/20250213-mxt_kyoiku01-100002608_1.pdf（2025 年 11 月 8 日参照）

[2] 文部科学省(2024) 高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 総則編（令和 6 年一部改訂）

https://www.mext.go.jp/content/20250213-mxt_kyoiku01-100002620_1.pdf（2025 年 11 月 8 日参照）

[3] 長谷守紘（2023), 令和の時代における日本型学校教育の実際―コロナ禍における中学校での教育活動を通して―, 岡崎女子大学紀要, 第 57 号, pp.67–76

[4] 田蔵奈緒（2023), アクティブ・ラーニング(active learning)の学習方法としての PBL ～日本の高等教育での PBL 学習法導入の考察～, 東洋学園大学紀要, 第 31 号, pp.244–259

[5] 文部科学省（2023），今 求められる力を高める 総合的な探究の時間の展開（高等学校編）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230531-mxt_kyouiku_soutantebiki03_2.pdf (2025 年 11 月 8 日参照)
[6] 文部科学省（2018），地域との協働による高等学校教育改革の推進
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/11/19/1411060_04_1.pdf (2025 年 11 月 8 日参照)
[7] 北陸 ESD 推進コンソーシアム（2020），北陸版 SDGs・ESD 実践ガイドブック
https://esd.w3.kanazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2021/06/e1b45c110126053d50933fd115f64b6c.pdf (2025 年 11 月 8 日参照)